二十世紀遺産

作・よこたたかお

登場人物

タダシ
天照
イダジ　レクオ
イダジ　妻
ゴマキ
ノストラダムス
民衆１・サンタ１・記者・パパラッ
チ
民衆２・サンタ２・スタッフ

本文

第一場

1945年

爆発音

人々が出てくる

民衆1「おい、あっちを見ろよ。空が光っているぞ」

民衆2「あの方角だと、どこだ？」

民衆1「ちょうど、ヒロシマかナガサキ辺りじゃないか？」

タダシ、天照が出てくる

タダシ「さっきの音はなんだ？花火でもやっているのか」

民衆2「タダシ、そういえば今日じゃなかったか？」

民衆1「今日？」

タダシ「弟が一人増えるんだ。きっとかわいいんだろうな」

民衆2「もう、妹ずらしてられない

ぞ」

天照「きちんとかわいがるわよ」

ラジオから君が代が流れる

民衆1「天皇の放送が始まるぞ」

全員、ラジオに聴き入る

玉音放送が流れる

タダシ「なんていっているんだ？」

天照「共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ……？」

タダシ「朕ハ帝国政府ヲシテ米英支蘇四国ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ……なぜだ？」

民衆1「天皇がアメリカにぬかずいたぞ」

タダシ「俺たちが今までやってきたことはなんだったんだ」

天照「お兄ちゃん、どういう意味？」

ノストラダムスが出てくる

ノストラダムス「これがお前たちの

言っていた日本だぞ！　みたか！
みたか！　アハハハハ！　俺の言っ
た通りじゃないか」
民衆１「天皇を侮辱する気か！」

　　牽制する民衆１にノストラダ
ムス、銃を出して

ノストラダムス「暴力で解決する問
題なのか？」
民衆１「ちくしょう……」
ノストラダムス「先に手を出したの
はお前たちだ。アメリカだってそう
いっていた気がするな」

　　ノストラダムス、発砲する

タダシ「俺はここを動かないぞ」
民衆１「おい、逃げるぞ」
タダシ「あんなものには負けない」
民衆２「何いっているんだ、本気だ
ぞ」
民衆１「俺は死にたくねえ」

　　人々逃げる

ノストラダムス「新しい日本が始まるぞ」

ノストラダムス、銃を撃つ
タダシ、倒れる
ノストラダムス、去る

天照「お兄ちゃん……」

赤ん坊の泣き声

タダシ「今日からお姉ちゃんだな」

君が代が流れる

第二場

縁側
蝉の声
レクオ、妻はじっとテレビを見つめている

妻「ねえ、つけましょうよ」
レクオ「どうしてだ」

妻「つけないと、意味ないでしょう」
レクオ「意味ない？」
妻「これ……」
レクオ「どうやってやるんだ」
妻「さあ……」
レクオ「これが、テレビかあ」
妻「これがテレビですよ」
レクオ「高かったんだぞ」
妻「わかってますよ」
レクオ「俺は、こんなの要らないと言ったんだぞ」
妻「わかってますよ」
レクオ「お前たちがどうしてもというから、買ってやったんだぞ」
妻「わかってますよ」
レクオ「俺は、お前たちのために買ったんだぞ」
妻「見たくないんですか？」
レクオ「お前たちがどうしてもというなら見せてやろう」
妻「やり方がわからないだけじゃないですか」

タダシの声「ただいまー」

妻「あ、タダシが帰ってきましたよ」
レクオ「おいタダシ、これ、どうやってつけるんだ」

タダシが出てくる

タダシ「あ、テレビ！　どうやってみるの？」
妻「それがわからないのよ」
レクオ「わからないか？」
タダシ「わからないよお」
妻「それじゃあ、テレビはつけられないわね」
タダシ「なんだ、残念だな」
妻「そうだ、お姉ちゃんに教えてもらいましょうよ」
タダシ「今日帰ってくるの？」
妻「あら、聞いてないの？」

天照がズカズカと入ってくる

天照「はい、これが今月の分」
妻「天照、毎月もありがとうね」
天照「もう用はないわね？　私は東京に戻るわよ」

妻「もうちょっとゆっくりしていきなよ」
天照「ゆっくり？！　私にはね、時間がないの。こんなことをしている余裕すらないのよ！　あなたたち、娘に食わせてもらって親としての尊厳というものはないの？」
レクオ「天照、お前もそろそろこっちに帰ってきたらどうだ」
天照「嫌よ。私は東京に暮らすの。こんなスラム街で腐っている暇はないのよ」
レクオ「東京の大学なんかに行って、不良にでもなるつもりか」
天照「いい？！　私のお兄ちゃんは、こんなところにいたから殺されたのよ！　お兄ちゃんは天皇を神だと思っていた。東京で天皇の顔を見て、天皇が普通の人間であることに気がついていれば死ななかった。お兄ちゃんは情報に殺されたのよ！」
タダシ「お姉ちゃん、これどうやってつけるの？」
天照「ああ、テレビ。買ったの？」
レクオ「どうしても見たいっていう

から」
天照「ここをひねるの」

テレビがつく

タダシ「ついた……」
天照「あなたの子供が殺された街よ」
妻「あなたたちが生きているほうが重要なのよ」
天照「……もう用はないでしょ。私は帰るわ」

天照、去る

妻「東京に行ってしまいましたね」
レクオ「あんなやつ、ほおっておけ。東京のどこがいいんだか」
タダシ「……これで、東京が見れる」
レクオ「私は、こんなもの見ん！」

レクオ去る

妻「ちょっとお父さん」

妻、去る

テレビに食い入るタダシ

タダシ　「僕には関係のないことだけど、　僕は天皇が日本国民を裏切った日に生まれた。　１９４５年８月１５日、　我がイダジ家の長男イダジタダシは過激な左翼主義者に銃殺された。兄は愛国心の強い人間だったので、天皇が言うこと、　それが彼にとっては全てだった。　僕は兄が殺されたちょうどその日に生まれた。　だから僕はお兄ちゃんの顔も声も知らない。ただ人づてにこんな人だったんだと教えられることはあっても、　僕はお兄ちゃんの思い出が何一つ残っていない。　僕のこの名前はお姉ちゃんが僕につけた。　イダジタダシ。　死んだ兄と同じ名前だ。　お姉ちゃんは僕によく死んだ兄の話を聞かせる。　『お兄ちゃんは情報に殺された、　お前は死んだお兄ちゃんの生まれ変わりだ』でもそれは僕には関係のないことだ。……だってそうだろう？　僕は天皇と会ったこともないし、　喋ったこともない。　お兄ちゃんとも会ったこと

がないし、喋ったこともない。ただ人づてに『天皇が日本国を裏切った』とか『お前のお兄ちゃんは愛国心の強い人だった』とかいわれただけだ。‥‥そうだ、今度寝台特急に乗って東京に行こうと思うんだ」

第三場

♪「ジングルベル」

タダシ「あ！　サンタだ！　サンタさん、握手してください」

サンタ1「はろー」

タダシ「わー、日本人だあ」

サンタ1「タダシ君、サンタを待ちわびているのかい？」

タダシ「そう、僕はサンタを待ちわびて待ちわびすぎてわびさびのわからない子どもになっちゃったんだよ」

サンタ1「子どもがわびさびをわからなくてもいいと思うよ」

サンタ2「子どもは子どもらしくしないとサンタさんはやってこないよ」

タダシ「ねえ僕東京に行きたいんで

す」

サンタ１「サンタは毎年冬にやってくるよ」

タダシ「わあい」

サンタ２「冬になるとめんどくさい子供たちの願い事を叶えにサンタは蛙に乗ってやってくるんだよ」

タダシ「どうして１２月２５日にしか来てくれないの？」

サンタ１「サンタさんは街の明かりが全て消えた１２月２５日にしか動けないんだ。だから毎日太陽と反対方向に居て太陽が出てくると尻を隠して煙突に逃げ込むのさ」

サンタ２「そして逃げ隠れたところの家で一年過ごしてその一年の間そこのサタンになるのさ。わかったかい坊や。だからサンタの衣装を着ているおじさんには決して近づかないことだよ」

タダシ「サンタさんはなんで太陽のあるところに出てこないの？」

サンタ１「サンタは泥棒だから、人に見つかっちゃならないんだ」

タダシ「僕のところは？」

サンタ２「サンタだよー」
タダシ「わあい」
サンタ１「君の願いごとは？」
タダシ「僕のは一個じゃおさまらないんだ」
サンタ２「でもサンタさんが叶えられるのは一つだけだよ」
タダシ「サンタさんってケチなんだね。……僕は願いは叶えない」
サンタ１「え？」
タダシ「それが願い事。ひとつだけに選んだ。願いは叶えない。それが願いなんだ」
サンタ２「とっても不思議な子だね。
サンタさんを前によくそんなことを
ヌケヌケといえるもんだ」
サンタ１「サンタはそんな子供には
プレゼントはあげないよ」
タダシ「プレゼントは要らないんだ。
でもそのかわり僕はサンタがやって
くる日、目を開けて待ってるんだ。
それでサンタさんが来たら聞くんだ。
どうすればサンタさんになれますか？
って。それで僕は将来世界中の子
供に光を与えるんだ」

サンタ２「サンタは夢しか売らないよ」
タダシ「サンタさんは夢を売ってどうするの？」
サンタ１「夢見がちな子供を世界にばら撒くのさ。そして世界をピーターパンだけにするのさ」
タダシ「僕はサンタになりたい」
サンタ２「君はまだ夢を見ている少年だね。早く、もっと早く成長して夢を見がちになったほうがいいな」
タダシ「それはどうすればなれるの？」
サンタ１「大人から現実っていう靴下をたくさんもらいなさい。そうすればサンタが４５歳のアルバイトに見えてくるから。そうすれば君は夢を見がちな少年になれるはずだよ」
タダシ「ホント？　僕もサンタさんになりたい」
サンタ１「それじゃあまず俳優志望にならなくちゃね」
タダシ「俳優志望？」
サンタ２「そして運転免許と現実行き切符をもらわなきゃね」

タダシ「僕は夢見る少年なんかじゃないよ」
サンタ1「君はいま夢を見ているんだ」
サンタ2「だから俺達が見えるのさ」
タダシ「なんで僕の前にいるの？」
サンタ1「僕達が君の前にいるんじゃなくて、君が僕達の前にいるのさ」
タダシ「なんで僕の目の前にいるの？」
サンタ2「きっと君は夢を見ているんだよ」
サンタ1「現実ではサンタは一人だ」
タダシ「夢？　ああ、なんだかそんな気がしてきた」
サンタ2「すごく現実的な夢だね」
タダシ「現実？」
サンタ1「現実を見据えた夢だね」
タダシ「なんだか頭が痛くなってきた」
サンタ2「君の頭がイタイのは夢の中じゃなくて現実なんだよ」
タダシ「サンタが町にやってくる」
サンタ1・2「サンタが町にやってくる」

サンタ１「頭のイタイはどこへ行った？」
タダシ「頭はここにイタイ。痛いけど……誰か薬を持ってない？」
サンタ２「頭痛にノーシン」
サンタ１「のーしんとう」
サンタ２「わかった。君のその痛みは脳震盪だ」
タダシ「え？……頭が痛い」
サンタ１「よかったね。痛いの原因がわかって」
タダシ「痛い、痛いよお、誰か助けて」
サンタ２「日夜待ってごらん」
タダシ「いたいよお」
サンタ１「日夜待てばその痛みも時期に止むだろうから」
タダシ「待てば直るの？　サンタさん、助けて」
サンタ１「僕はサンタ１だよ」
サンタ２「僕はサンタ２だ」
サンタ１「サンタ３はいないよ」
サンタ２「日夜待てばサンタがくるよ」
サンタ１「日夜待ってサンタがくる」

サンタ１・２「サンタが町にやってくる」

サンタ１「君の脳震盪はそのうち自分の過ちに気づいて君が脳震盪になる番が来るはずだから」

サンタ１・２「ただ待っていれば君は太陽になれるんだ」

タダシ、もがき苦しむ。

第四場

イダジ家

タダシ「（頭を押さえて）痛い」

レクオが出てくる

レクオ「なんだタダシ、また寝てたのか」

タダシ「うるさいなあ。頭痛いんだよ」

レクオ「飯ができだぞ」

妻、レクオ、タダシの三人で

ちゃぶ台を囲む

妻「はい。今日のご飯は第二次佐藤内閣ですよ（和紙を出す）」
レクオ「政治の話？」
妻「今日はそれしかないのよ」
タダシ「佐藤内閣はもう食べたじゃん」
妻「1964年のでしょ。今は1967年よ」
レクオ「どんなのだ？」
妻「知らないわよ。それは食べてみて」
妻「でも古食（ふるしょく）よ」
レクオ「（和紙を食べながら）前と同じ味がするよ」
妻「おくさんってつらいわ」
レクオ「いや、おいしいおいしい」
タダシ「同じ味だよ」
レクオ「なにを言っているんだ。政治家の日本への愛国心とゴマすりがおいしいんじゃないか」
タダシ「政治は嫌い。もっとポップなものはないの？」
レクオ「横文字を使うんじゃない」

タダシ「お父さんだって使っている
くせに」
レクオ「ポップとはなんだ」
タダシ「若者はポップが好きなんだ
よ。日本社会はしいたけの味がする
から嫌い」
レクオ「お前はそんなにマツタケを
食いたいのか？」
タダシ「別にシメジでいいけどさ」
妻「好き嫌いはよくありませんよ。
どっちも食べて。歴史が残飯になる
とカラスがつつきにくるんだから」
レクオ「そうだ。米だってきちんと
お百姓さんが朝から晩まで育てて…
…」
タダシ「そういう話はもういいよ」
レクオ「お百姓さんをバカにするの
か？！」
タダシ「大人のいいわけに使われる
方がお百姓さんもやだと思うけど」
レクオ「お前は日本人じゃないな、
アメリカ人だ」
タダシ「刺激的な和紙はないの？
1945年の八月十五日とかさ」
妻「それは売り切れよ。売り切れて

博物館に保存されちゃったわよ」

タダシ「おいしい和紙がでてこないかなー」

レクオ「これだって十分おいしいじゃないか」

タダシ「老人と若者だと舌の構造が違うんだね」

妻「戦争以来おいしい和紙なんて見ないわね」

レクオ「それどころか和紙の供給が減ってきている」

妻「今じゃ、石油でできた石油紙って紙をみんな食べているそうよ」

レクオ「うちは石油紙は食わん。コピーでできる情報なんていうものは摂るもんじゃない」

タダシ「ベロでも変えたら」

レクオ「一生このままだ」

妻「こういうところが少年ね」

レクオ「詩人はいつまでも少年なんだよ」

妻「かっこつけちゃって。かっこわるい」

レクオ「うるさい。お前の口は物を食べるためにできているんじゃない

のか？」

妻「戦後の食べ物も悪くないね。文明開化の味がするわ」

レクオ「どっかで聞いたことあるような」

タダシ「戦時中よりおいしいの？」

レクオ「そうだな。戦時中は添加物の多い食べ物ばかりだったからな。タバコばっかり吸っている人にはおいしいものだったろうけど、タバコも吸えない庶民にはあの味は悪かった」

妻「いつもまずい牛乳飲まされていた気がするわ。私、牛乳ってああいう味がするのかと思っていた」

レクオ「添加物の少ない和紙を食べたいもんだ」

妻「石油紙って、添加物が多そうで恐いですね」

タダシ「僕は、添加物の多い食べ物のほうが好きだな」

レクオ「添加物は体に悪いぞ。ほら、有機野菜を食べなさい」

タダシ「父さんは三種の神器って知ってる？」

レクオ「ああ、ヤタの鏡、草薙の剣、ヤサカニのマガダマか？　あれがどうした」
タダシ「三種の神器って、電気洗濯機、電気冷蔵庫、白黒テレビのことだよ」
レクオ「それがどうしたんだ」
妻「今の流行よ」
タダシ「（テレビを見て）つけないの？」
レクオ「こんな添加物の多い食べ物食べていられるか」
タダシ「でもそれじゃあ流行に遅れちゃうよ」
レクオ「流行なんて時代遅れの太陽が照らす合わせ鏡だろ。時代は自分の懐中電灯で見ろ」
妻「うちは、新聞紙すら食べていない家族なんですから。若い子がそういうのも無理はないですよ」
タダシ「今じゃ、インターネットっていう食べ物もあるみたいだよ」
レクオ「高級な和紙を食べていれば丈夫な人間になれるんだぞ」
タダシ「それでも世間は安いおいし

いって言って体に悪いマクドナルド
のハンバーガーを食べてるけどね」
妻「死ぬために食べるのね」
レクオ「周りは周りだ」
タダシ「東京に行きたいんだ。こん
なスラム街の生活なんてヤなんだよ。
俺は自由になりたいんだ」
レクオ「ダメだって」
タダシ「ねえ、東京は東京タワーが
オリンピックで、当たり前田のクラ
ッカーなんだよ」
レクオ「なんだ、東京タワーがオリ
ンピックで当たり前田のクラッカー
って」
タダシ「テレビではそう放送してい
たんだよ。東京では、サリンジャー
っておじさんのライ麦畑が流行って
いるみたいなんだ」
レクオ「ダメだ、ダメだ。ここで十
分だ」
タダシ「お母さん」
妻「私は、否定しませんよ」
タダシ「東京タワーがオリンピック
で当たり前田のクラッカーなんだ」
妻「東京タワーはオリンピックで当

たり前田のクラッカーですね」

レクオ「気分が悪い」

　　レクオ、出て行く

妻「食事中は、テレビを見ない人なのよ」

　　妻、出て行く

第五場

　　電車の中
　　切符を買う

タダシ「もう家に帰るものか。また夢観光だ。誰かさらって行ってくれないかなあ。どうしたらバクに食われてナイトメアに会えるんだろう。……それにしても、うちから夢って遠いなあ。寝台特急で6時間だ。でもまあ乗り継ぎ一回だからいいか。電車ってすごいな。夢と現実を駆ける天馬みたいだ。現実に疲れたおっちゃんもいるし夢に恋焦がれたケバ

ケバの黒い女の人もいる。俺はどっちだろ、ここに乗っている人から見たら俺はやっぱりスラムの田舎から来た、頑張って夢追いしてる青年なのかな。それともイケてる夢売りに見えるかな」

乗降する人々
ゴマキが乗ってくる

ゴマキ「あの、隣いいですか？」
タダシ「あ、はい。どうぞ」

ゴトンゴトン……

ゴマキ「あの、東京に行くんですか？」
タダシ「え、ああ。はい。あなたも？」
ゴマキ「はい、そうなんです。私、東京って初めてだから、ちょっと恐くて」
タダシ「ああ、そうなんですか」
ゴマキ「東京はよくいくんですか？」
タダシ「姉が住んでいるんで、たま

に」
ゴマキ「え、すごい！　お姉さんが東京に住んでいるんだ。お姉さんに会いにいくんですか？」
タダシ「え……ああ、まあ。あなた、どうして東京に行くの？」
ゴマキ「私、太陽になりたいんです」
タダシ「太陽……」
ゴマキ「テレビで日本中を照らす、とびっきりの太陽になりたいんです」
タダシ「ああ、アイドルのこと」
ゴマキ「昼も夜もわからないくらい明るい太陽になってやるんです」
タダシ「そうしたらみんなサングラスをかけなきゃならないね」
ゴマキ「色眼鏡で私のこと、見てくれればそれでいいんです」
タダシ「君、東京で泊まる当てあるの？」
ゴマキ「いえ……知り合いがいなくて」
タダシ「どうするの」
ゴマキ「ノストラダムスさんのところに泊めてもらおうと思って」
タダシ「ノストラダムス……ああ、

芸能事務所社長の」

ゴマキ「そこのオーディションを受けるんです……あ、テレビがあるじゃないですか」

　　ゴマキ、テレビをつける

　　テレビにはノストラダムスが映っている

　　テレビの声が大きくなる

第六場

記者「どうも、初めまして。ノストラダムスさんといえば、１４世紀ヨーロッパでペストの感染を食い止めたとして有名ですが、ペストを治したときの心境は？」

ノストラダムス「そりゃあうれしいですよ」

記者「ペストの原因はなんだったんですか？」

ノストラダムス「たわいもない鼠です」

記者「また、戦後ポツダム宣言をしてからの日本を立て直した立役者と

してご活躍なされますね」

ノストラダムス「私は、ヒロシマに原爆が投下される前から日本の政策に疑問を持っていたんです。ヒロヒト天皇がアメリカに頭を下げてから、国民は随分変わりましたね。私が予想したとおりになった」

記者「その功績について世間はあなたのことを救世主と呼んでいますが、そのことについては？」

ノストラダムス「嬉しいかぎりです。私もこれでも医者ですから、人のためになることはとても意義のあることだと思っています」

記者「ノストラダムスさんのこれからの目標は？」

ノストラダムス「いまはまだ第一日目があけたばかりです。日本はもうすでに戦後ではありません。これからが勝負です」

記者「第一日目といいますと？」

ノストラダムス「神は第一日目に光と闇を作り出したんです」

記者「光あれば闇もある。ということですね。これからは？」

ノストラダムス「第二日目は、神は空と海を創造します。そして第三日目、神は海から大地を隆起させ地球の基盤を作ります」

記者「どういうことですか？」

ノストラダムス「日本はこれからテレビによって光と闇に分けられ、新たな大地を生み出す。ということです」

記者「それでは、四日目からは？」

ノストラダムス「第四日目、天は太陽と月と星を創造します。そして第五日目神は海の魚と、空の鳥を創造します。第六日目、神は自らに似せて人間作り出します」

記者「これは、なんという宗教なんですか？」

ノストラダムス「日本の安全を保障する宗教です」

記者「安全を保障する……」

ノストラダムス「略して安保といいます」そして七日目には安息日がやってきます。そして日本はこれからもっと発展していくでしょう」

記者「今後のノストラダムスさんの

活動は？」

ノストラダムス「今はもうテレビの時代ですからね。製紙工場を作ろうと思います」

記者「おおー」

ノストラダムス「もう和紙だけでは供給は追いつかない。これからは石油紙の時代です。石油の製紙工場を作り、今の紙の値段の半分の価格でみなさまに紙をお届けしようかと思います」

記者「すばらしい。それで、開始はいつからになるんですか？」

ノストラダムス「早ければもう始めたいと思っています」

記者「おおー」

ノストラダムス「石油紙の供給によって、東京の情報は四倍にも増えます。もう日本はすでに戦後ではない。新しい時代の幕明けとなるのです」

第七場

テレビがプツリと切れる

イダジ家

レクオ「つまらん」
妻「おもしろいですよ。タダシがいればよかったのに」
レクオ「あいつはいつも間が悪い」
妻「あなたが悪いんですよ」
レクオ「さっぱりだ。タダシは今日も帰ってこないのか」
妻「あなたがあんなこというからですよ」
レクオ「あいつはなにもわかっちゃいないよ」
妻「自由が欲しいのよ」
レクオ「自由なんて下品な言葉使うんじゃない」
妻「下品だなんて、夢と子供のおもちゃでしょ。あなたは頭が固いのよ」
レクオ「夢を見てるのか」
妻「ヘタしたら夢の中から出てこないかも知れませんよ」
レクオ「タダシは夢を見てるのか」
妻「あなたがそんなことを言うから」
レクオ「夢ばっかり見に行ってるから東京なんかに憧れるんだ。東京に行ってどうするつもりなんだ」

妻「東京がそんなに嫌いなの？　太陽だって毎日私らを照らしているじゃない」
レクオ「太陽が照らしてるのは地球から7秒前の光だよ。あいつ夢ばっかり見てるから。非行に走るに決まってる」
妻「非行だって少年の特権よ。大人になったら夢の中で飛ぶこともできないんだから」
レクオ「夢見て俳優にでもなったらどうするつもりだ。俺の子に限ってそれは許さん」
妻「バカとはなによ。息子の幸せをどうして考えてあげられないの？」
レクオ「ふん、もっと静かな嫁と結婚すればよかった」
妻「大人にもなって電車に乗れない夫なんか要りませんよ」
レクオ「電車は現実逃避の道具だ。多くの大人は朝通勤電車でうとうとして夢を見ているから現実すら見通せない人間になっちまうんだ自分の持っている正しい光、懐中電灯で見る光が正しい光なんだ」

妻「古い人って言われますよ」
レクオ「古いんじゃない。正しいんだ」
妻「そうですか」

二人、一緒にテレビを見る。

レクオ「なにが楽しいんだ？」
妻「なにって、……おもしろいんですよ」
レクオ「嘘にしか見えない」
妻「嘘じゃないですよ」
レクオ「虫めがねで見ても点々しか見えない」
妻「近づきすぎですよ」
レクオ「わからん」
妻「あれ？（テレビが壊れる）」
レクオ「ほら、こんなものは所詮そんなもんだよ」

テレビのザーっていう音。それが大きくなると、やっと番組らしき音が聞こえてくる。

第八場

ている

天照が先頭に立って演説をし

天照「我が、東京大学闘争全学共闘会議は、大学側の登録医制度に反対し、無期限ストライキに突入することを宣言する！」

機動隊が突入してくる

天照「バリケードを張るんだ！」

民衆１、民衆２が機動隊から天照を守るように配備する

天照「大学に、制度の改革を要求する！学生に権利を与えよ！」

機動隊、銃を発砲する

天照「私はここを動かないぞ！」

民衆１「おい、逃げるぞ」

天照「あんなものには負けない」

民衆２「何いっているんだ、本気だ

ぞ」
民衆１「俺は、死にたくねえ」
天照「何を言っているんだ。死んでもこの防衛ラインは突破させない！」
民衆２「天照、俺は死ぬなんてごめんだぞ」
民衆１「両親が泣くぞ」
天照「遊びじゃないんだ！　甘ったれたことをいうな！」
民衆２「お前の考え方にはついていけない」

民衆１、民衆２逃げる

サイレン音

サイレンが止むとそこは食堂に変わる

タダシが出てくる

タダシ「お姉ちゃん」
天照「ああ、タダシ」
タダシ「昨日、ストがあったみたいだけど」
天照「機動隊が押し寄せて、バリケード開放。……たった２００人の機

動隊によ？！　こっちの学生は一体何人いると思っているの。　改革を起こすつもりもない、根性のない学生どもだったのよ。東京の大学に毎日通って、就職のために内申良くして、テストではいい点とって。何が学生闘争よ。命を投げ出しての信念じゃないの、そうは思わない？」

タダシ「うん」

天照「学生全員は、見ているだけで何もしない。いざ機動隊が来たら逃げるのよ」

タダシ「みんな、外から見てるのが好きなんだよ」

天照「お前のお兄ちゃんだって、信念に命を投げ出したの。けど見てみたらどう、信念に命を投げ出すこともできないような人間が社会を作っているのよ。私の兄は何のために死んだというのよ。」

タダシ「捕まらなくてよかったね」

天照「まあ、そうだね……タダシ、珍しいね。家には帰らないの？」

タダシ「家出してきた」

天照「そう。それじゃあお姉ちゃん

の家に転がりこみなよ」
タダシ「そうするつもりだった」
天照「ストで授業もないし。そうだ、東京を案内してあげようか」

二人は電車に乗る

天照「電車は初めて？」
タダシ「いや、ここに来るときにも使った」
天照「そっか。東京ってのは電車で移動するのよ。電車は安いし速いから便利なの」
タダシ「車は使わないの？」
天照「車は免許を取らなきゃいけないからダメ。それに事故でも起こしたら大変だからね」
タダシ「そうなんだ」
天照「まあ簡単に言えば私にお金がないってことよ」
タダシ「電車って、どこに連れていってくれるの？」
天照「夢にだよ」
タダシ「東京は夢じゃないの？」
天照「東京駅？」

タダシ「うん」

天照「東京に憧れている人間はみんな勘違いするんだけどね、世界の中心は東京じゃないのよ。ましてやアメリカでもない。東京にいる人はみんな世界の中心がアメリカだ、っていうの。でも私はそうは思わない。だって、『あ』っていうのはあかさたな、はまやらわの五十音の一番はしっこでしょう。五十音の中心は『ふ』よ。だから世界の中心はフランスなの」

タダシ「東京はどの当たり？」

天照「東京は、『と』だから中心から右に二つ、下に二つね。フランスから一回乗り継いで四駅かしら」

タダシ「東京は田舎なんだ」

天照「東京よりもヒロシマのほうがもっと都会ね。フランスの一個上」

タダシ「僕たちのいたスラム街は？」

天照「私たちの住んでいたスラム街は『い』で始まる街だから、アメリカの隣、東京駅から右に三駅、上に三駅ね」

タダシ「『い』だからアメリカの一

個下だね」
天照「私はね、こんな五十音の端っこにあるようなスラム街になんて住みたくないの。……そうね、夢の街銀座を案内してあげる」

アナウンス「ぎんざ～ぎんざ～」

「プシュー」
「ガヤガヤ…」

タダシ「わーー」
天照「ここが夢の町銀座よ」
タダシ「すごーい」
天照「夢みたいでしょ」
タダシ「きれーい」
天照「こっちにいきましょ」

二人はデパートのウィンドウにへばりつく

天照「ねえねえ、これかわいくない？」
タダシ「お姉ちゃん、何か買うの？」
天照「買わないわよ。だってお金が

ないんだもの」
タダシ「え？」
天照「タダシ、夢の中で自分の体が動いたことってある？」
タダシ「あんまり」
天照「夢の街も一緒。喉から手が出ても、窓の向こうには届かないの」
タダシ「だから、ウィンドウショッピングっていうんだ」
天照「スラム街っていやね。街の明かりもないから、あの街じゃ夜になると自分で懐中電灯を持っていないと外を歩けないでしょう」
タダシ「え、東京って、懐中電灯を持っていなくても夜でも外を歩けるの？」
天照「だってさっき夜になったわよ」

夜になる（しかし、見た目にはなにも変わらない）

タダシ「夜？　もう夜になったの？まだ全然明るいけど」
天照「東京の夜はこれくらいだよ」
タダシ「明るいんだね」

天照「東京の明かりは私たちを導いてくれるの」

タダシ「まるでテレビみたいだね」

天照「東京を照らす夜空の星星はね昔、東京に住む人間によって地上に引っ張り降ろされたのよ」

タダシ「それが、あのウィンドウを照らす明かりなの？」

天照「流れ星が流れたら願いをこめるっていうでしょう。あれは嘘、願いを叶えるから星が流れるの。たくさんの人が願いを願うから、空の星が全て商品棚に押し込められたのよ」

タダシ「確かに空に星ひとつない」

天照「人間の夢を叶えた結果よ」

タダシ「だからこんなに地上が明るいんだね」

天照「ほら、窓の中を見てみて、窓の中の星はきれいでしょ」

タダシ「きれい。でも手が出せない」

天照「東京にはね、夜空の星を買ってきてそれを商品棚にかざる職業があるのよ。東京では美しいものは全て商品なの」

タダシ「自由がないね」

天照「自由はお金で買うの。それが野望ってものよ」

タダシ「星が全部なくなったらどうなるの？」

天照「星という美術品が全部なくなっても人の野望は完成しないわ」

タダシ「どうして？」

天照「野望の『望』は月の王を亡くすと書いて『望』だから最後は月を捕まえなきゃならないの」

タダシ「月を商品棚にかざるんだね」

天照「夜空から光がなくなる日に東京は野望で満たされるのよ」

タダシ「東京だけが星空を買って、他の国の人は迷惑しないの？」

天照「星から出た光は何百年前の光。だから憎しみの光がたどり着くのも何百年後」

タダシ「人任せなんだね」

天照「そういうものよ、世界の中心というのは」

蝉の声

タダシ「東京だと、夜でも蝉が鳴い

ているんだね」
天照「街頭の下で太陽と間違えてメスに求婚しているのね」
タダシ「街頭の下、蝉は人生で何回の夜を過ごすんだろう」
天照「東京に夜はないのよ……（テレビを見て）あ、ノストラダムスが映ってる」
タダシ「この人……」

第九場

ノストラダムスの記者会見

記者「今年の国民納税額全国一位ですね」
ノストラダムス「ありがとう」
記者「やはり、製紙工場の成功でしょうか」
ノストラダムス「そうですね、もう和紙なんて買う人はいないいんじゃないですか？」
記者「周りどこを見ても石油紙ですね。最近では偽者も出回ったくらいで」

ノストラダムス「偽者は大歓迎です。偽者も本物も売れれば世界がお金で回りますから」

記者「最近では、石油紙に関する人体への影響が指摘されていますが」

ノストラダムス「大丈夫です。石油紙は人体にはまったく影響はありません」

記者「ノストラダムスさんの次の大予言はなんでしょう」

ノストラダムス「次は、太陽を育成することです」

記者「アイドルのことですか？」

ノストラダムス「私は、日本を照らすアイドルのことを太陽と呼んでいるのです。ああ、これは誰にも言わないでくださいね。私とあなただけの秘密です」

記者「秘密って、なんだかエッチな気分になってきますね。私とあなただけ。……つまりこのテレビを見ている日本国民全員の秘密ですね」

ノストラダムス「東京だけじゃない、テレビというこの小さい箱を見ている全国の国民が、私のことを見てい

るんですね」
記者「全国一億人があなたのプライベートを覗きたがっていますよ」
ノストラダムス「私は覗かれるとゾクゾクゾクするんです」

第十場

イダジ家

レクオ「つまらんテレビは消せ」

妻、テレビを消す

妻「我が家の楽しみって言ったら、テレビくらいのもんじゃないですか」
レクオ「気持ち悪い」
妻「隣の村岡さんもテレビを買ったっていうのに。もう、テレビを見ないのはうちくらいなもんですよ」
レクオ「私は決して、こんなものには毒されないぞ」
妻「近所の話題についていけないんですよ」
レクオ「そんなもの、ついていかな

くていい」
妻「昔は私も、憧れていたんですよ、
あの太陽に」
レクオ「それじゃどうして東京にい
かなかったんだ」
妻「東京は、不自由な街ですから。
ここは、何もない街ですから」

妻、テレビをつける
そこには、天照が学生闘争で
乱闘している姿

妻「騒がしいですね」
レクオ「東京は騒がしいもんだろう」
妻「（テレビを見ながら）あら、ひ
どい。殴り合いですよ」
レクオ「プロレスかなんかか？」
妻「学生と機動隊がもみ合っている
みたいですよ」
レクオ「あれ、これ天照じゃない
か？」
妻「あらまあ、こんなテレビに出る
ようになっちゃって」
レクオ「おい！　なにやっているん
だ。機動隊なんかに捕まるな。殴れ、

蹴れ。そんなに柔に育てた覚えはないぞ！　ほら、フック、フック」
妻「お父さん、天照はそこにはいません」
レクオ「ああ、ついそこにいるように見えて」
妻「お父さんが一番テレビに食いついているじゃないですか」
レクオ「これは、天照だったから。……ああ、今殴られた！　大丈夫か？　おい、お母さん。天照が殴られたぞ。早く手当してやらんと」
妻「これは録画ですよ。もう何日も前の出来事ですから、あせらないでください」
レクオ「録画？　何日前だ」
妻「ちょうど、七秒前のことじゃないですかね」
レクオ「俺の知らない間に天照はこんなことに……」
妻「そんなに気になるんだったら、行けばいいじゃないですか。東京」
レクオ「東京……」
妻「私たちの元に届く情報は、東京より７秒遅いんですから」

レクオ「東京まで何時間だ？」
妻「6時間ですよ」
レクオ「お母さんが行って来てくれ」
妻「私は安全な場所から見ているのが好きなんです」
レクオ「見ているだけじゃ、何もかわりゃしないだろ」
妻「それが視聴者ってやつですよ……いかないんですか？」
レクオ「……いや、一緒に天照を見守ろう」

第十一場

　　テレビを見る二人

　　オーディション
　　「コーラスライン
　　オーディション参加者がコーラスラインを走っている
　　休憩時間になる
　　参加者、それぞれに汗を拭いたりストレッチをしたり

ゴマキ「あの……」

天照「なんだ？」
ゴマキ「いえ……東京の方ですか？」
天照「ああ、うん。そうだけど」
ゴマキ「私、地方から出てきて、ちょっと今日緊張していて、あの、こういうオーディションってよく受けるんですか？」
天照「オーディション？　何のこと？」
ゴマキ「え、今日のこのオーディション……（チラシを取り出して）

『次世代の太陽を発掘しよう、ノストラダムス第一期アイドルオーディション』……」
天照「なに、これって高度経済成長期の東京を引っ張る政治的リーダーを育成するための試験じゃなかったの？」
ゴマキ「いや、太陽って、アイドルのことですよ」
天照「どおりでおかしいと思った。なんで政治なのにこんなに走るのかと思っていたのよ」
ゴマキ「間違えたんですか……あ、ノストラダムスさんだ」

ノストラダムスが出てくる

ノストラダムス「オーディション参加者のみなさん、初めまして。私が事務所社長のノストラダムスです。いきなりこんなことを言うのもなんですが、社会というのは理不尽です。上に立つものが下にいる人間を奴隷のように扱うわけです。社会はあなたたちにやさしくありません。その証拠に、今日のこのオーディション。この中から選ばれるのはたった一名。選ぶのは私。そして選ばれるのはあなたがたです。もう既にあなたたちは私よりも下にいる。是非ともこの理不尽なオーディションをかいくぐってきてください」

面接が始まる

ゴマキ「あの、私こういうの初めてなんですよね」

天照「まあ、見てなって。これが最低の俳優のお手本よ」

参加者１「（威勢よく）よろしくお願いします！」
ノストラダムス「それじゃあここに腰掛けてください」
参加者１「はい！」
天照「ああ、いるよね、こういう威勢のいい人」
参加者１「受験番号０７２１鈴木一郎です！」
ノストラダムス「君は、どうしてこのオーディションに参加したの？」
参加者１「募集を見たときに、僕ならこの企画にぴったりだろうっておもったんです」
ノストラダムス「ええと、君は演技の経験は」
参加者１「はい、小学生のときに『泥棒と子猫』で泥棒役をやっていました」
ノストラダムス「ああ、それは学芸会ね。俳優訓練とかは日常からしてる？」
参加者１「はい！　週二回スクールに通って演技の勉強をしています」
天照「ああ、もうダメだね」

ノストラダムス「チケット制？」
参加者１「チケット制です」
天照「チケット制」
ノストラダムス「ええと、君はどうして俳優になろうと思ったの？」
天照「こういう人に限って、『演技が好きだから』っていうのよ」
参加者１「はい！　僕は、演技が好きだからです！」
ノストラダムス「はい。ありがとう（書類をまとめる）」
ゴマキ「これはダメな例なんですね？」
天照「それで最後に、空回りして、変な空気だけ残して帰るのよ」
参加者１「あ、一発芸やります」
ノストラダムス「え、やらなくていいから」

参加者１の異様なやる気に、つい目がいってしまう

参加者１「アイ・アム・ニート！」
ノストラダムス「……あ、そう」
参加者１「はい！　ありがとうござ

いました！」
ノストラダムス「本当に、これをやった人がいるからすごいよな」

参加者２が立ち上がる

参加者２「（ギャルっぽく）失礼しまーす。よろしくおねがいしまーす」
天照「こいつは、頭が足りないタイプのやつね」
ノストラダムス「ここに腰掛けてください」
参加者２「ありがとうございます☆受験番号６９６９の後藤まりなです☆」
ノストラダムス「ええと、どうして今回はオーディションに参加したんですか？」
ゴマキ「これもダメな例ですね？」
天照「そして、こういうやつに限って売れない事務所に所属してるのよ」
参加者２「ええと、事務所の社長が受けろっていうから、受けてみたんです。でも、言われた仕事はなんでもやります。頑張ります☆」

ゴマキ「ホントだ」

ノストラダムス「なんでもって、それじゃあここで脱げっていったら脱げるか？」

参加者２「ええ、脱ぐんですかぁ？　それはちょっと事務所からＮＧが出てるんですよー。え、でもエッチして合格にさせてくれるんだったら、エッチならしてもいいですよー」

天照「ああ、もうイライラしてきた」

ゴマキ「大丈夫ですか？」

ノストラダムス「君の思う、俳優についての意見を聞かせてもらってもいいかな」

参加者２「え、意見ですかぁ？　私、そういうの考えたことないからわからないんですよ。あ、でも、演技してるときって、違う自分になれるから楽しいですよね」

天照「他の人になんて、なれるわけないだろ！」

ゴマキ「どうしたんですか？」

天照「私は、信念のない俳優が大っきらいなのよ。こういうやつが日本の演劇界をダメにしているのよ」

　大声を出す天照に周りが視線を寄せる

天照「あ、すいません……」

ゴマキ「あ、次私だ。……失礼します」

ノストラダムス「どうぞ、おかけ下さい」

ゴマキ「受験番号１０１１の後藤マキです」

ノストラダムス「どうして今回は応募したのかな？」

ゴマキ「えと、東京に憧れて、それで出てきたはいいんですけど、何をやっていいかわからなくて、それでテレビを見ていたらノストラダムスさんが映っていたから、東京に着いたらまずノストラダムスさんのところに行こうと思って」

ノストラダムス「君は、テレビを見てオーディションを受けたわけだ」

ゴマキ「はい。それじゃダメですかね」

ノストラダムス「そして君は東京に

憧れを持っている。東京は観光したか？」
ゴマキ「いいえ、全然東京のこと知らなくて。ダメですかね」
ノストラダムス「いやいや、結構。むしろ東京のことなんて知らないほうがいい。私はこれから新たな日本を作ろうと思っているんだ。ちょうど、君みたいな田舎ものが憧れるような東京をね。君の憧れる東京像というものを聞かせてもらえないかな」
ゴマキ「え、東京ですか。東京のことはよくわからないんですけど、田舎に比べて街は明るいし、人は多いし、みんなきれいな服を着ていて、見たこともない建物がズラーっと並んでいて、それでみんなマクドナルドのハンバーガーを食べて、目が悪いんです」
ノストラダムス「そうだ。私が作りたいのはそういう世界なんだよ。街はネオンで明るく、人が混在し、全員が流行に乗ったファッションをし、なんの機能性も持たない建物が立ち並び、昼食にはマクドナルドを食う。

そしてみんな目が悪い。そんな世界を作りたいと思っているんだ。ありがとう。もう十分聞けたよ」
ゴマキ「あ、ありがとうございます……（天照に）大丈夫だったかな」
天照「まあ、大丈夫じゃない？　次は私か……失礼します。受験番号1012天照です」
ノストラダムス「ええと、どうして今回は、オーディションに参加したのかな」
天照「東京を変えてやりたいと思ったからです」
ノストラダムス「東京を変えたい？」
天照「なんの信念も持たないでのうのうと社会を作っているやつらが許せないんです。人は信念に生きて信念に死ぬ生き物です。我が兄は信念を持って死にました。しかし信念を持たないやつらは今でものうのうと生きています。あのとき兄を裏切って逃げたやつらが許せないのです」
ノストラダムス「君、もしかして学生扮装のとき先頭に立っていた子じゃないか？」

天照「信念を持つ学生は機動隊によって殺戮されました。けれど、信念を持たない学生は機動隊に恐れをなして逃げてしまいました」

ノストラダムス「それでも君は生きているじゃないか」

天照「私は、信念に生き、信念に死にます」

ノストラダムス「……わかった。ありがとう」

天照、席に戻る

ノストラダムス「みなさま、お疲れ様です。オーディションは終了いたしました」

参加者１「合格者は誰なんですか？」

ノストラダムス「合格者はこの中に二名います」

ざわめく参加者たち

ノストラダムス「１０１１番、１０１２番以上」

ゴマキ「え、私？」

参加者２「どうして私じゃないんですか？」
ノストラダムス「そんな質問が出る時点で勝敗は決まっているんだよ。解散！」

　ゴマキと天照を残して解散する一同

ノストラダムス「おめでとう。二人が合格者だ」
ゴマキ「どうして二人なんですか？」
ノストラダムス「君たち二人を見てピンときた。東京に憧れ、なんの知識もない君。東京に嫌気をさし、変革を起こしたい君。この二人が組めば、新しい世界を作ることができる」
天照「どういうことです」
ノストラダムス「君は東京の現実的な部分に触れるんだ。そして君が東京の夢の部分に触れる。日本中の国民に夢を与え、一方では上下関係という圧倒的な現実を見せつける。それこそ、マスメディアのあるべき理想の姿だとは思わないか？」

ゴマキ「私、そういう話よくわからないんです」
ノストラダムス「みんな、同じ価値観になるってことだよ。これから君たち二人をアイドルユニットとして売り出すことにした。君たちの私生活はこれから私が管理させてもらう」
天照「その私生活を日本国民全員が見るわけですね」
ゴマキ「なんか、覗きみたい」
ノストラダムス「そう、日本国民はこれからみんな、君たちの覗きになるんだ。ワクワクするだろ」
天照「覗かれてるって思うだけでなんだか体の自由がなくなっていくみたい」
ゴマキ「束縛って悪いことじゃないんですか？」
ノストラダムス「束縛は成功のための枷。自由はないほうが人生成功するもんだ」
ゴマキ「私たちは何をやるんですか？」
ノストラダムス「君たちには、ありもしない過去を語ってもらう」

第十二場

テレビ番組

ゴマキ「はい、ということで今日は、私たちの青春時代をすごした故郷の街にやってきましたー。天照、私たち二人は、このスラム街で育ったんだよね」

天照「そうそう。昔は二人で一緒によく遊んだよねー。あ、この町並みなつかしー。あ、あそこの駄菓子屋。二人でよくいったよねー」

ゴマキ「ねー」

天照「東京とはやっぱり全然違うね」

ゴマキ「ビルもないし、ネオンもないし、明るい未来もないわね」

天照「このテレビを見ている日本のみなさん、私たちはこれから、このスラム街にも企業のためのオフィスビルを作り、東京を世界経済の中心地としていきます」

ゴマキ「また、居住にやさしいマンション建設を目指して、世界の中心

地として東京を活性化させていきます」

天照「耐震強度ナンバーワンの」

天照・ゴマキ「木村建設」

カメラマン「はい、カット」

　そこは、撮影スタジオとなる

ノストラダムス「いやー、よかった。これでスポンサーも満足するよ」

天照「こんなハリボテのセットが、私たちの故郷だなんてね。いやになっちゃうわよ」

ノストラダムス「スラム街に戻りたいのか？」

天照「あの街よりはましかもね」

ゴマキ「いいんですか、私たち中学生の同級生でもなんでもないのに」

ノストラダムス「いいんだよ。そのほうが見ている人にはわかりやすいんだ」

ゴマキ「でも嘘じゃないですか」

天照「思想を流布するのも、テレビに出るのも一緒。語るべきは個人の過去じゃなくて、多くの人にどうい

う未来を見せるかよ。　あれ社長、マネージャーは？」

ゴマキ「マネージャー？」

ノストラダムス「今日から、新しくマネージャーをつけることになった。タダシという男だ」

天照「私の弟よ。上京してきて働く場所がないから、斡旋してあげたの」

タダシが出てくる

タダシ「失礼します。今日から天照さんと後藤マキさんのマネージャーをやらせていただく、イダジタダシといいます」

ゴマキ「あれ、あなた」

タダシ「え……あ！　隣の席の！」

天照「知り合いなの？」

タダシ「あ、いや」

ゴマキ「東京に出てくるときに、偶然同じ電車に乗っていたの。あのときは、あなたにあえてよかった。初めてだったから不安だったの」

ノストラダムス「ゆっくりしている暇はないぞ。次の仕事があるんだ」

天照、ゴマキ、ノストラダムス去る

テレビ局廊下

タダシ「これがテレビ局かあ。スラム街で見ていた風景はこれだったんだ」

ゴマキが出てくる

タダシ「あ、後藤さん。仕事は終わったんですか？」

ゴマキ「今、休憩時間なの。なんか、後藤さんって呼ばれると変な気持ちね。本名なのに」

タダシ「みんなゴマキって呼んでいますからね」

ゴマキ「またあなたに会うなんて思っていなかったわ」

タダシ「僕もですよ。東京の生活には慣れましたか？」

ゴマキ「ええ。でも住む場所はノストラダムスさんの寮だし、食べ物も毎日撮影のお弁当ばっか。東京で生

活しているのかテレビの中で生活しているのかわからないわ。　私生活もあったもんじゃないわよ」

タダシ「みんな、アイドルの私生活を覗くのが好きなんですよ」

ゴマキ「私このまま、嘘をつき続けて生きていくのかしら。　添加物の入ったお弁当を食べながら生きていくのかしら」

タダシ「僕の姉は、信念に生き、信念に死にます」

ゴマキ「私は、信念なんかでおなかいっぱいにはならないし、信念のために死ぬことなんてできないわ」

タダシ「……もう、休憩も終わりじゃないですか？　僕は楽屋で事務作業でもしてます」

ゴマキ「（タダシに抱きつき）ねえ、いやなの。戻りたくないの」

タダシ「時間がありませんよ」

ゴマキ「たった二回会った人にこんなことをして、淫売だなんて思わないで。ただ、寂しいのよ。誰も私を見てくれないんだから」

タダシ「日本があなたを見ているじ

ゃないですか」

ゴマキ「ねえ、私のことを守って。誰も知らない私のことを見て。添加物のない料理を私に食べさせて。毎日夜も私に電話して。毎朝起きたら私のことを考えて」

タダシ「あなたはテレビに出ている人なんですから。それに、僕は姉と同居をしている身だし。いつバレるか」

ゴマキ「ねえ、マネージャーでしょ。いつもそばにいてくれたっていいじゃない」

タダシ「……仕事ですから。ずっとそばにいますよ」

ゴマキ「それじゃあ今度、私が服を買うのについてきて。マネージャーでしょ」

タダシ「……いいですよ」

そこは街になる

ゴマキ「ねえタダシ、これよくない？」

タダシ「よく似合っているよ」

ゴマキ「私にどんな服を着てほしい？」
タダシ「今ので十分だよ」
ゴマキ「それじゃあ、タダシは何色が好き？　どんな模様が好き？」
タダシ「それじゃあ、青とか」
ゴマキ「青ね」

民衆１、民衆２が出てくる

民衆１「あ、すいません。あの、ゴマキさんですか？」
ゴマキ「え、ああ。そうですけど」
民衆１「テレビ見てます。ファンなんです、握手してください」
ゴマキ「はい」

握手するゴマキ

民衆２「あ、ゴマキさんって、彼氏がいるんですか？」
タダシ「マネージャーです」
民衆２「ああ、マネージャー。よかった」
民衆１「彼氏だったらショックだっ

たね」

民衆２「サインしてください」

サインするゴマキ

民衆２「ありがとうございます」

民衆１「あ、テレビで見るよりもきれいですね」

ゴマキ「あ、ありがとうございます」

ホクホクしながら去っていく

民衆１、民衆２

タダシ「アイドルになると、ロクにデートもできないね」

ノストラダムス、天照が出てくる

ノストラダムス「次は、歌手デビューをしてもらう！」

そこはコンサート会場になる

歓声

民衆１「何か喋るぞ」
天照「東京」
民衆２「天照が、東京っていったぞ」
ゴマキ「神田」
民衆１「ゴマキが神田って言ったぞ」
天照「秋葉原」
民衆２「秋葉原って言った」
ゴマキ「御徒町」
民衆１「御徒町！」
天照「上野」
民衆２「上野！」
ゴマキ「鶯谷」
民衆１・２「鶯谷！」
天照「日暮里」
民衆１・２「日暮里！」
ゴマキ「西日暮里」
民衆１・２「西日暮里！」
天照「田端」
民衆１・２「田端！」
ゴマキ「駒込」
民衆１・２「駒込！」
天照「巣鴨」
民衆１・２「巣鴨！」
ゴマキ「大塚」
民衆１・２「大塚！」

天照「池袋」
民衆1・2「池袋！」
ゴマキ「目白」
民衆1・2「目白！」
天照「新大久保
民衆1・2「新大久保！」
ゴマキ「新宿」
民衆1・2「新宿！」
天照「代々木」
民衆1・2「代々木！」
ゴマキ「原宿」
民衆1・2「原宿！」
天照「渋谷」
民衆1・2「渋谷！」
ゴマキ「恵比寿」
民衆1・2「恵比寿！」
天照「目黒」
民衆1・2「目黒！」
ゴマキ「五反田」
民衆1・2「五反田！」
天照「大崎」
民衆1・2「大崎！」
ゴマキ「品川」
民衆1・2「品川！」
天照「田町」

民衆1・2「田町！」
ゴマキ「浜松町」
民衆1・2「浜松町！」
天照「新橋」
民衆1・2「新橋！」
ゴマキ「有楽町」
民衆1・2「有楽町！」
天照「東京」
民衆1・2「東京！　山手線サイコー！」
天照「最後の曲、聞いてくれてありがとうございます。私たち、これからも頑張ります！」
ゴマキ「ありがとー」
タダシ「それではこれから、CD即売会とさせていただきます」

ファンが二人の前に並ぶ

天照「（ファンと握手をしながら）ありがとうございます」
ファン1「握手しちゃったよー」
ゴマキ「（ファンと握手しながら）ありがとうございます」
ファン2「うれしいっす。ありがと

うございます」
タダシ「ノストラダムスさん、ＣＤは完売しました」
ノストラダムス「次はドラマに出てもらう！」

テレビドラマ

天照「犯人はあなたね！」
ゴマキ「ど、どうしてそれを！」
天照「簡単なトリックだったわ。あなたは犯行当日、あなたは熱海になんかいなかった！」
ゴマキ「そうよ。私が犯人よ。どうしてわかったの」
天照「あの刺し傷は、犯人が左利きじゃなきゃできない傷跡。左利きと聞いてピンと来たのよ」
ゴマキ「……あなたには負けたわ」

楽屋

ノストラダムス「お疲れさまー。新しく出したＣＤは１００万枚の大ヒット、出演するドラマは視聴率４０％

を記録。大スターだよ」
天照「私たちが東京って言えば、視聴者は東京っていうし、私たちが新大久保って言えばみんな新大久保っていうの」
ノストラダムス「流行は、君たちが生み出しているんだよ」
ゴマキ「次は中央線にでもしましょうか」
タダシ「いや、京浜東北線でいいんじゃないか？」
ゴマキ「ええ、総武線にしましょうよ」
天照「そういえば最近、二人とも仲がいいわね。なんかあったの？」
ゴマキ「え、そうですか？」
タダシ「そんなことないですよ」
ノストラダムス「二人がこう言えば民衆もそれにしたがう。言うなれば二人は日本の太陽だ。遠くから地球を照らしてそれを見守っているというね。」
天照「太陽かあ」
ゴマキ「憧れてたもんね」
ノストラダムス「これからもっと忙

しくなるぞ」

ゴマキ「働けるっていいね」

天照「ちょっと忙しいけどね」

ノストラダムス「忙しいくらいがちょうどいいんだ。自由っていうのはないほうが幸せだ。だからもっと自由を失って東京の象徴になるんだ」

ゴマキ「自由を失うと東京の象徴になれるんですか？」

ノストラダムス「そうだ。忠犬ハチ公だって、主人を待って待ちわびて、自分の自由を犠牲にしたから今でも渋谷の象徴として生き残っているんじゃないか」

タダシ「確かに」

ノストラダムス「小便小僧だって、自分の時間も作らずに小便ばかりしているから小便の象徴になったんじゃないか」

天照「あれって小便の象徴だったんですか？」

ノストラダムス「もちろん」

天照「そうなんだ」

ノストラダムス「誰だってそうだ。西郷隆盛だって夏目漱石だって鈴木

園子だって、みんな死亡して自由を失ったからそれぞれの象徴として今でも民衆に語りつがれているんだ」
ゴマキ「鈴木園子って誰？」
タダシ「わかんない」
ノストラダムス「日本国民は、もうお前たちに盲目だ。恋は盲目。テレビを見ているやつらは全員、目が見えなくなっているぞ」
タダシ「……あれ、目が見えない」
ゴマキ「どうしたの？」
タダシ「あれ、コンタクト落としたかな。いや、入ってる……（頭を抑える）痛い……」
天照「どうしたのタダシ」
タダシ「痛い、頭がすごく痛い。助けて、助けてお姉ちゃん」
天照「ちょっと、救急車呼んで！」

　　サイレン

タダシ「今まで僕に関係がないと思っていた街、東京は、姉がアイドルになることで僕に関係のある街になった。ノストラダムスさんは、本当

に東京を変えることができる人だ。ノストラダムスさんの書いた台本どおりにテレビが放送され、ノストラダムスさんが書いたように東京の人たちが動く。東京が変化していくのを間近に見ることができた。けど一つ、予想外のことが起きた。国民の目が悪くなったのだ。気がつかない間に、テレビの見すぎでみんな目が悪くなった。僕もついにメガネをするようになった。僕の姉はそれから、ノストラダムスさんに不信感を抱くようになった」

第十三場

押し寄せる記者

記者「先日から、テレビを見すぎて体調不良を起こしている患者が増えていますが」

ノストラダムス「テレビとは関係ありません」

記者「しかし、患者のほとんどが視力の低下を訴えていますが」

ノストラダムス「テレビとは関係はありません」
記者「原因は、石油紙に含まれている添加物だという指摘がありますが」
ノストラダムス「石油紙は人体に影響はありません」
記者「あなたの発明を非難している人たちがいますが」
ノストラダムス「それなら私の発明を使わなければいい」
記者「被害者への弁明はないのですか」
ノストラダムス「ノーコメントです」
記者「このまま被害が増えてもあなたは何も措置をとらないんですか」
ノストラダムス「まだ、死者は一名も出ていません」
記者「実際に被害を訴えている人がいるんですよ！」

楽屋になる

ノストラダムス「ああ、疲れた」
ゴマキ「大丈夫ですか？　あんな書かれ方して」

ノストラダムス「そろそろ、メディアが口うるさくなってきた」

天照、タダシが入ってくる

天照「ノストラダムスさん、どういうことですか。テレビの影響で視力が下がることは明白じゃないですか。弁明の一言もないなんて非道ですよ」
ノストラダムス「テレビと症状に関係はない」
天照「食事の中に毒が入っているからです」
ゴマキ「毒を混ぜたって言いたいの？」
天照「石油コンビナートが出来てから工場廃水は川に流されていく一方。川はどんどん汚れて魚がまず汚染される。そしてその魚を食べた町の人達は毒におかされてしまう。そうじゃないんですか？」
ノストラダムス「そういう考えもあるだろう」
天照「石油紙は体に悪いんです。それを食べされられているからタダシ

は体を壊しているんです」
ノストラダムス「しかし、その石油紙を食べているのは民衆だ。民衆が選んで石油紙を食べているのだ」
天照「もう民衆に選ぶ目はないんです」
ゴマキ「私達もってこと？」
天照「そして私もだ」
ノストラダムス「石油紙が体に悪いなら民衆は食べないはずだ」
天照「真実を述べるべきです」
ノストラダムス「次の手は打ってある」

　　　ノストラダムス去る

タダシ「お姉ちゃん、あんなこと言っていいの？」
天照「あなた、被害者なのよ。黙ってなんていられないわ」
タダシ「でも、それじゃあ仕事がなくなっちゃう」
天照「仕事なんていいのよ、あなたがいることが大事なんだから。ねえ、こんなことをするのは辞めましょう

よ。国民の体を蝕むのを助長しているだけだわ」

ゴマキ「引退するの？」

天照「私は国民を殺すために東京に来たんじゃないの。導くために来たのよ」

ゴマキ「でも、仕事がなくなっちゃう」

天照「あなた、それでもまだテレビに出たいの？！」

ゴマキ「私の人生の生きがいだから。これがないと、生きていけない」

天照「あなたの生きがいは人を殺すことなの？　考えてみてよ、このまじゃあ被害は増えるだけだわ」

ゴマキ「さっき、手は打ってあるっていったし」

タダシ「お姉ちゃん、まだ仕事は続けていようよ。マキだって、これがなくなったら路頭に迷って死んでしまうかもしれないよ」

天照「どうしてこの子をかばうの？　またお兄ちゃんと同じ境遇の人を作ってしまうのよ」

タダシ「僕に日本国民なんて関係な

い。関係ある人間のほうが大事だ」
ゴマキ「私も、タダシのいうことに
賛成するわ」
天照「わかったわタダシ、もううち
から出て行ってちょうだい」

天照去る

ゴマキ「かばってくれてありがとう」
タダシ「お姉ちゃんこそ、周りが見
えなくなっているんだ。大丈夫、ず
っとついているから」
ゴマキ「うれし」

タダシに抱きつくゴマキ
フラッシュ
シャッターを切る音

タダシ「なんだ？」

パパラッチが出てくる

パパラッチ「熱愛発覚！やっぱり
あなたたち、付き合っていたんです
ね」

タダシ「写真に撮ったんですか？」
パパラッチ「明日には新聞の一面に報道ですよ」
ゴマキ「自由を侵害されたわ」
タダシ「僕たちの私生活を覗くんじゃない。訴えるぞ」
パパラッチ「覗いたこの目は日本全国の国民の目、あなたは国民を訴えられるんですか？」
タダシ「カメラを貸せ！」

タダシ、パパラッチのカメラを取る

フィルムを抜く

パパラッチ「あ……」
タダシ「お前らなんて、この程度の存在なんだ！」
ゴマキ「あれこの人、目が見えないの？」
パパラッチ「いやあ。カメラがなきゃ目が見えないんですよ」
タダシ「目が悪いのか」
パパラッチ「カメラマンってのは現実を見れないという意味では、テレ

ビでしか物事を見れない視聴者と一緒でね」
タダシ「気味が悪い」

タダシ、ゴマキ去る

ノストラダムスが出てくる

ノストラダムス「お疲れさん」
パパラッチ「ああ、どうもどうも。ごひいきに。これが本物です」

パパラッチ、ノストラダムスにフィルムを渡す

ノストラダムス「ありがとう。お前、目が見えないのか」
パパラッチ「カメラがなきゃなんも見えないんで」
ノストラダムス「それじゃあこれをやろう」
パパラッチ「なんですかこれ」

ノストラダムス、パパラッチにサングラスをやる

パパラッチ「ああ、見える見える」
ノストラダムス「これを掛ければ、どんなに目が悪くたって世界が見えるようになる」
パパラッチ「でも世界がちょっと黄色く見えるような」
ノストラダムス「それは色眼鏡という名の目だ。今度からは、それを掛けて街を歩くようにするんだな」
パパラッチ「また人気に火が着きますね」
ノストラダムス「人気者にはスキャンダルがつきものだからな」

民衆２が出てくる

民衆２「おいおい、なんだよそれ」
パパラッチ転じて民衆１「ノストラダムスさんが新しく発売した色眼鏡だよ」
民衆２「お、世界がよく見える」
民衆１「目が悪くなったら、これを掛ければいいんだ」

そこに、サングラスを掛けた

ゴマキとタダシが出てくる

ゴマキ「もう、サングラスを掛けなきゃ外も歩けないわね」

タダシ「目が悪くなった僕たちにはちょうどいいかもしれないね」

民衆１「あ、あれよーく見ると、ゴマキじゃねえか？」

民衆２「肩組んで歩いているぞ」

タダシ「まずい、見つかった」

逃げるタダシとゴマキ

しかし、どんなに逃げても逃げた先に民衆がいる

民衆１「シャッターチャンス！」

フラッシュを焚く民衆

フラッシュが焚かれる度にゴマキとタダシのスライド写真が投影される

たとえばそこには「熱愛発覚！」「ラブホテルで一晩」「事務所マネージャーとの熱い一夜」などの見出しがつく

見出しは段々と「ヤリマン、淫乱」「見境なく男と過ごす」や「天照と喧嘩」「アイドルユニット解散か？」などと誇大化されていく

フラッシュの焚かれる量が増え、そこは記者会見上になる

記者１「それでは、記者会見を始めさせていただきます」
記者２「マネージャーとの熱愛が報道されていますが、それについては」
タダシ「私は、後藤マキさんを愛しています」
記者１「それについて、姉の天照さんはどういっているのでしょうか」
タダシ「姉とはもう口を利いていません」
記者２「ユニットが解散するという噂が流れていますが」
ゴマキ「ユニットは、解散しません」
タダシ「巻きにはこのまま芸能活動を続けて欲しいと思っています」
ノストラダムス「いや、解散します」
ゴマキ「え、」

ノストラダムス「私も始めて知りました。二人がこんな関係だったなんて。アイドルが恋をしたら終わりです。したがってこのユニットは解散させていただきます」

タダシ「どういうことですか、聞いていないですよ」

記者１「これから日本国民は一体何を見ていればいいのでしょうか」

ノストラダムス「そこでです。こうやったあまりに強いフラッシュの嵐に対して、私はこんなものを発明しました」

　ノストラダムス、サングラスをかける

ノストラダムス「これを掛ければどんなに明るいフラッシュにも耐えることができます。みなさん、これからは眼鏡を掛けていきていきましょう」

記者２「それで真実が見えるんですか」

ノストラダムス「ええ、これを掛け

れば、世界が黄色く見えます」
記者1「残った天照はどうするんですか」
ノストラダムス「天照は私の敵です」

詰め寄る記者、そのまま去る

第十四場

タダシの家
レクオがテレビを見ている

妻「なんだかんだ言ってみてるじゃないですか。テレビ」
レクオ「子供がどんなことをしているか監視してるんだ」
妻「撮影なんだから本当の姿は見えてきませんよ」
レクオ「親としての義務だろう」
妻「義務とか言っちゃって」
レクオ「なんだ」
妻「なんでもありません。あれから何ヶ月経ったんでしょう。天照、もう立派な太陽になって」
レクオ「最近タダシのやつ顔色悪く

ないか？」
妻「テレビだからちょっと変わるんですよ」
レクオ「テレビに写ると変わるのか」
妻「そうですよ」
レクオそういうもんか」
妻「そうですって。カメラに写った自分が思っていた自分と違うときってありません？　とくに声とか」
レクオ「カメラなんて撮らん」
妻「撮ってくださいよ。カメラに自分の姿をとると、どうしても思っていた自分と違うんですよね。もっときれいだ、とか、こんな声じゃない。とか思うんですけど、やっぱカメラで撮ると違うんですよね。つまりカメラに写ると、ちょっと変わるってことなんですよ」
レクオ「いいたいことはわかった」
妻「だからここに写っているタダシも天照も現実とは少し違うんですよ」
レクオ「そういうもんか」
妻「だからそうですって」
レクオ「そうか」
妻「信じてくださいよ」

レクオ「信じてるよ」
妻「もしくは、あなたの理想のタダシと違うだけかもしれませんよ」
レクオ「え？」
妻「もともとあなたの目にタダシは理想と違って写っていたのかもしれませんよ」
レクオ「なに難しいことを言ってるんだ」
妻「だからタダシがテレビに出てるんですよ」
レクオ「意味がわからん」
妻「あなたは強情なんですよ。自分の理想と違ってていいじゃないですか」
レクオ「強情じゃない」
妻「タダシはあなたの理想像じゃないんですからね。人間なんですから」
レクオ「わかってるよ」
妻「それならタダシの顔色も悪くは見えないはずですけど」
レクオ「俺だけがおかしいみたいじゃないか」
妻「そうですよ。（テレビを見て）顔色が悪い！」

レクオ「え！」

妻「顔色悪いじゃない。タダシ、大丈夫？　こんな話ししている場合じゃないわよ」

レクオ「さっきと言っていることが逆じゃないか」

妻「ちょっと熱っぽく見えるわね。たぶん37度3分くらいよ」

レクオ「さすがお母さん」

妻「ちょっと働きすぎたみたいね。ほら、テレビだって悪くないでしょう」

レクオ「なんだよ」

妻「タダシのことがわかっちゃうんですから」

レクオ「テレビを見ればタダシのことがわかるのか……」

妻「以前よりタダシのことを見ていない？」

レクオ「俺がか？」

妻「そうよ。あなたタダシのことこんなに食い入るように見たことないでしょう」

レクオ「また日本語じゃない言葉を使う」

妻「こうしているほうが安心するのね。覗いているほうが」

レクオ「こうしないとタダシが見えないから、テレビしか見るものがないからだ」

妻「タダシが自分の子どもだと思って安心してたから今までそこまで見なかったのよ。でも今はタダシは自分の子どもという範疇から出ちゃってる。だからあなたは安心していられなくなっているのよ。わかってる？」

レクオ「そんなんじゃない」

妻「とか言ってやっぱり見てる。タダシがどんなことをしているか全部知りたい。タダシが自分の理想と違うとそれを愚痴る。でもその愚痴はタダシに聞こえる必要はない。だって、覗いて文句を言っているのがあなたにとっての安心で、あなたの気を抑えられるものなんですもの。あなたは結局、タダシを変えるだけの説得力がないことを知っていたのよ。だからいつも怖くて怒ることしかできない。結局あなたは怖かったの。

だからテレビからタダシを覗いて愚痴を言うのがあなたの理想になっているのよ」

レクオ「なにわかったような口を利いて。おまえだってなにもしていないじゃないか」

妻「私はできるかぎりタダシが進みたい方向に進めばって思ってたわよ」

レクオ「結局お前も口だけだ。そんなこと言ってなにもしてないじゃないか」

妻「私はなにもしないことが仕事だったの」

レクオ「そんなの言い訳だ。言い訳なんて聞きたくない。お前はタダシがいないから俺に愚痴を言いたいだけなんだよ」

妻「なにもわかってないのね」

レクオ「うるさい。俺はそんなダメ人間なんかじゃない」

テレビのなかでタダシが倒れる

妻「タダシが倒れた！」

レクオ「なに？」
妻「これ、生放送でしょ？　タダシが倒れたわ」
レクオ「あ、画面が切り替わった」
妻「タダシ、やっぱり顔色が悪かったんだわ」
レクオ「ノストラダムスのせいだ。あいつはやっぱりサタンだ。東京の街にサンタみたいなことしにいったけど、やっぱりあいつはサタンだったんだ。東京に行ってくる」
妻「でも、テレビのできごとだから」
レクオ「行くんだ。現にタダシは倒れたんだ」
妻「テレビで起きたことを全て信じてもしょうがないじゃない」
レクオ「これは生放送だろ？　今起きたことは事実だ。編集できないんだから事実だ。もう俺は見たんだ。タダシが倒れるところを。タダシは今倒れたじゃないか」
妻「そうだけど」
レクオ「タダシが倒れるところを見た。親としてこんな状況に遭遇したら助けないわけがないだろう」

妻「わかったわ。それじゃあ私はここで、テレビであなたの様子をずっと見てるわ」
レクオ「わかった」

第十五場

天照が出てくる

天照「あれ、お父さん！」
レクオ「おお、天照」
天照「どうしたの」
レクオ「テレビを見ていたたまれなくなって東京に出てきたんだ」
天照「ああ、あの記者会見見た？ひどかったわ。あんなにひどい記者会見はじめてみた」
レクオ「東京中、アイドルユニットの解散の話題で持ちきりだな」
天照「あんな話、まるで聞いてもいなかったのよ。テレビ見てたら急にあの話。ノストラダムス、ついに民衆の勢いに逆らえなくなったのよ。結局あの男も信念なんて持っていない、流行に流されるだけの男だった

の」

レクオ　「タダシは今どうしているんだ」

天照　「知らないわよ。　マキとイチャイチャしているんじゃないの」

レクオ　「タダシと絶交したのか？」

天照　「絶交？　なによそれ」

レクオ　「新聞に報道されていたぞ」

天照　「なにそのガセネタ！　そんなこと一言もいっていないのに」

レクオ　「今じゃお前は日本の敵だぞ。ゴマキの人生を棒に振ったひどい女ということになっているぞ」

天照　「そんなの知らないわよ。　ユニットを解散させたのもノストラダムスよ。　私じゃないわ」

レクオ　「そうでなくても、　民衆はそう信じているぞ」

天照　「そんなのひどいわ！　私から解散をするわけないじゃない」

レクオ　「でもそっちのほうがスキャンダラスだろう。　おいしい情報を食べたがるのが民衆だ」

天照　「東京にいる人間は、　おいしいものばかり食べたがるのね」

レクオ「天照、スラム街に帰って来なさい」
天照「そのほうがいいのかな。夜も明かりのない、田舎の町のほうがいいのかしら」
レクオ「いや、そうじゃない。国を変えるんだ。間違った情報ばかりに踊らされる民衆を正すために俺たちが光を照らしてやるんだよ」
天照「どうやってやるの？」
レクオ「12月25日、サンタクロースがやってくる日、東京中の電気が落ちたところに大きな太陽を降らせてやるのさ。スラム街でもテレビの影響が出始めてきてるんだ」
天照「このスラム街でもテレビを見ている人はいるの？」
レクオ「町のほぼ全員がテレビを持っているよ」
天照「ひどいわね……計画っていうのはなに？」
レクオ「実はな、12月25日にノストラダムスが新しい発明の記者会見を行うそうなんだ」
天照「新しい発明？」

レクオ「新しい月をこの国に作るらしい」

天照「月までも、地上に引っ張ってくるのね」

レクオ「その記者会見当日、一台の飛行機を使って会場に突っ込もうと思うんだ」

天照「そうすれば、ノストラダムスは死ぬ」

レクオ「そうだ。そして、月は消え、街からは明かりがなくなり、今までどおり真っ暗な東京が返って来るんだ」

天照「わかった。私も手伝うわ」

　　レクオ去る

天照「やっぱり石油紙は体に悪いんだ。こんなものをみんなが食べていたから目が見えなくなってしまうんだ。（空を見上げる）もう東京で星なんて見られないんだな。東京が空に買われそうな気がするよ。夜空を見て感動したのはあの日の青春時代以来。私はずっと空のあの太陽のよ

うになれると思っていた。でも、最近気がついた。太陽は夜には出ない。夜には月がでるのみ。でも、その月ももう東京に買われて見えなくなってしまう。東京はついに月まで手に入れちまったのか。もう夢は空にないんだな。暗くてなにも見えないや。まるで失明したみたいだ。東京に月を戻すためには、私が東京の太陽にならなければならないんだ。そうだ。これから立ち上がってノストラダムスを告訴しなければならないんだ」

第十六場

天照、レクオ去る

ノストラダムス、ゴマキ、タダシ

ゴマキ「どういうつもりなんですか？
解散って」

ノストラダムス「解散したくないのか？タダシの交際を否定するような姉だぞ」

ゴマキ「いえ、でもどうして急にあ

んなところで」

ノストラダムス「ことを大げさにしてみただけだよ。そのおかげでお前はもっと世間からひっぱりだこになったじゃないか」

タダシ「でも、彼女の肉体的疲労と精神的苦痛はどう解消するんですか」

ノストラダムス「いいか、売れるということはね、それだけ本人が傷つくということなんだ。そして最も民衆に受けるためには、最終的には死ななくちゃならない。これはその前段階だよ」

ゴマキ「私、死ぬんですか？」

ノストラダムス「尾崎豊だって、芥川龍之介だって、神話の中の天照だって、みんな死んで太陽になったんだ。お前だって、死んだら太陽になれるんだぞ」

ゴマキ「そ、そっか」

タダシ「ねえ、それでいいの？」

ゴマキ「でもやっぱ、私売れたいし……ねえノストラダムスさん、次はどうすればもっと売れるようになる？」

ノストラダムス「もっと最上の演出をしなきゃならないかもしれないな」

タダシ「ノストラダムスさん、ゴマキを殺すんですか？」

ノストラダムス「殺さない。象徴にするんだ」

ゴマキ「私も、そうなりたい」

タダシ「でも、ああ。それじゃあ国民にも悪い情報を与えるだけですよ。こっちが操作した添加物じゃないですか。このまま添加物の多い情報を摂取し続けたら、国民だって病気になってしまいますよ」

ノストラダムス「すでに民衆は死に向かって歩いているよ」

タダシ「あなたは、大量殺人を犯そうとするんですか？」

ノストラダムス「私じゃない、これは東京が決めたことなんだ」

タダシ「ああ、やっぱりおねえちゃんのいうことが正しかった。あなたは間違っていますよ。マキ、バカげている。逃げよう」

ノストラダムス「恋人と駆け落ちか。悪くない演出だな。でももっと面白

い演出がある」
ゴマキ「私、あなたじゃない。この人と寝るわ」
タダシ「そんな……」

ゴマキ、タダシの目の前でノストラダムスとキスをする

タダシ「辞めてよ……見たくないよ」

フラッシュが焚かれる

ゴマキ「ほら、みんな見ているじゃない。このほうがドラマチックな展開よ」

もう一度キスをする
民衆1、民衆2が出てくる

（サングラスを掛けている）
民衆1「おおー、すげー。チューしちゃってるぞ」
民衆2「あそこがたってきた！」
ゴマキ「ほら、私をみてもっと興奮しなさいよ」

ノストラダムス「みんなむさぼるように お前のことを見ているぞ」

タダシ「こんなこと辞めてよ！」

　　タダシ、去る

民衆１「あ、ここでやっていいかな？」

民衆２「いいんじゃやね？」

　　民衆１、ティッシュを持ってくる

　　民衆１、民衆２そのティッシュをばら撒きながら

民衆１「号外だー！　号外だー！　ゴマキが事務所の社長とヤッているぞー！」

　　一面にティッシュの山ができる

ノストラダムス「どんどん情報が増えていくぞ」

ゴマキ「みんな私をおかずにご飯を

食べているのね」
民衆2「一面のティッシュにおかず
は女ってな」
民衆1「この快感、止められない
な！」
民衆1・2「号外だー！」
ゴマキ「ねえ、だんだんと頭が痛く
なってきた」
ノストラダムス「そのうち、咳が出
てくるようになる」

　　ゴマキ、咳き込む

ゴマキ「もう、ダメみたい」
ノストラダムス「みんなお前が死ぬ
のを見たがっているぞ」
民衆1・2「号外だー！」

　　ティッシュを撒き続ける
　　倒れるゴマキ

ノストラダムス「ゴマキが死んだ」
民衆1「ゴマキが死んだぞ」
民衆2「ゴマキが死んだ」
民衆1「号外か？」

民衆2「号外だ」
民衆1・2「号外だー！」

第十七場

記者会見
ノストラダムスと記者がいる

記者「近頃いろいろな発明品が多く、日本に多大な影響を与えているノストラダムスさんですが、本日また新しい発明に成功した模様です。今日はその発明品の発表会です。それではノストラダムスさん。今日の気持ちはどうですか？」
ノストラダムス「今日は今までに無い発明をしました。これが完全な機能で完璧に作動すれば日本の未来はもっと明るくなります。これが私から国民みなさまへのクリスマスプレゼントです」
記者「それはどういう発明ですか？」
ノストラダムス「それは見てからのおたのしみです」
記者「ということで今その発明品が

発表されます！　それではカウントダウンを開始します。１０，９，８，７，６，５，４，３，２，１……ゼロ！」

　発明品を覆う大きな幕が下りるとものすごく大きな発光体が出てくる

記者「ノストラダムスさん、これはなんですか？」

ノストラダムス「これは日本の新たな月です。これは少量のエネルギーで多くの光を発します。それによって今まで暗かった日本の夜空も明るく照らされて星さえ、月さえいらないほどの明るさを保つことができます」

記者「それはすごい発明ですね。これで日本の消費エネルギーが減って家庭にもやさしい電気代で済むということですね」

ノストラダムス「そういうことです」

記者「それではこれを祝して……」

突如明かりが消える。停電。
日本から光が消える。

記者「どうしたんだ？！」
スタッフ1「停電だ！　明かりが消えたぞ！」
ノストラダムス「どうしてだ……」
スタッフ1「早く直せ！」
記者「直らないのか？」
スタッフ1「明かりをともせ！」
記者「星の明かりを頼りにするんだ！」
スタッフ1「月は見えるか？」
記者「月？　月というものは見えません」
ノストラダムス「東京は月も買ってしまったのか」
記者「スタッフ！　周りは見えるか？」
スタッフ1「見えません。目の前が停電して目が見えません」
記者「星はみえるか！」
スタッフ1「星も見えません！」
記者「懐中電灯は？」
スタッフ1「ありません！　全て太

陽の光に明かりを任せていたら自分の目から懐中電灯がなくなりました！」
記者「誰も懐中電灯のあるやつはいないのか！　眼鏡はどうした！」
スタッフ１「月の光を頼りに、掛けてくるのを忘れました！」
ノストラダムス「みんな星に頼りすぎたからだ。みんな石油を食べていたから自らの懐中電灯を失ってしまったんだ」

鐘が鳴る
人々、もがき苦しみ出す

第十八場

「ジングルベル」
タダシとサンタ１，２が出てくる。

サンタ１「体の調子はどう？」
サンタ２「脳震盪は治った？　１２月２５日になったから迎えに来たよ」
サンタ１「街じゅうが暗くなったら

迎えに来るっていったでしょ」

タダシ「脳震盪？」

サンタ１「君の病気だよ」

タダシ「脳震盪じゃない。なにかだよ」

サンタ２「なにかってなに？」

サンタ１「サンタには教えてくれないの？」

サンタ２「誰かに毒でも盛られたのかな？」

タダシ「苦しい……サンタさん、助けて」

サンタ１「君の脳震盪はそのうち自分の過ちに気づいて君が脳震盪になる番が来るはずだから。そういったでしょ？」

タダシ「苦しいよお」

サンタ２「君の脳震盪は確かに自分の過ちに気がついた。そして君を元に戻すよう手配した」

サンタ１「しかし君はそれに気づかずテレビに出続けた」

サンタ２「石油紙を食べ続けた」

タダシ「助けて」

サンタ１「君は自分自身がついに脳

震盪になったんだ」
サンタ２「もうサンタは君のことを助けない」
タダシ「助けてくれたことなんていくせに」
サンタ１「そうだった。君はサンタが街にやってくると待ちわびていたが、君は待ちわびすぎて詫びをしなくちゃならないんだ」
サンタ２「サンタが街にやってくる」

「サンタがまちにやってくる」
という文字達は「にちやまってサタンがくる」となる

サンタ１「日夜待ってサタンが来る。」
サンタはいないんだよ」
サンタ２「サンタは待ちわびすぎるとサタンになってくるんだな」
サンタ１「もう誰も君を助けないよ」
タダシ「サンタさん……」
サンタ２「サンタは来ない。来るのはサタンだけ」
タダシ「誰なの、サタンって」
サンタ２「最後にビルに登った男さ」

サンタ１「君は大事なものに気づかなかった。気づくための目を持っていなかった」

サンタ２「君が１９６５年の四日市喘息の最初の被害者だ」

サタン１「あれ？　それだったら君の苦しみは脳震盪じゃなくて喘息だったんだね」

タダシ、急にせきをし始める。

サタン２「ほらやっぱり」

タダシ「（せきをしながら）苦しい助けて。死にたくない。目が見えなくなってく。目が、目の前がどんどん白くなってく。目が見えない。目が見えないよお。助けて。助けてってば」

サンタたちも急に苦しみだす

第十九場

テレビに病人が苦しむのが映っている。

記者「見てください。この病人の数。石油コンビナートから出た排水のせいでこんなにもの人が苦しんでおります。やはり石油紙は人体に害を与えるものだったということでしょうか。これから四日市市が独自に喘息患者認定制度を発足させ、ノストラダムス氏を告訴する意向を示しております」

　依然として病人は苦しんでいる。

記者「石油紙は日本に大量に供給され、これからの配給が見送られています。だがこのニュースを流しているのも石油紙なのです。これから石油紙と人間がどう付き合っていくかということが最大の課題なのではないでしょうか。石油紙を廃止しろという意見も多々ありますが、肥大化したメディアを止めることは不可能でしょう。これから新たに難しい問題となって日本の話題をさらってい

くことでしょう」

第二十場

　　レクオが民衆を先導してデモを起こしている
　　みんな懐中電灯を手に手に持っている

レクオ「明かりを返せ！」
民衆1・2「明かりを返せ！」
天照「これは？」
レクオ「ノストラダムスのところに告訴しにいくんだ」
天照「人が集まったんだね！」
レクオ「みんな自分の過ちに気がついたみたいだ」
天照「これでお父さんも有名人だね」
レクオ「テレビに出るのも悪くないもんだな……みんな、作戦決行は12月24日午前0時、つまり12月25日と24日の境目だ！」
民衆1・2「おー！」

　　天照を残してみんな去る

天照「なんで気がつかなかったんだろう。東京は星を買ったんじゃないんだ。星を見る地球の心を買ったんだ。確かに私は自由を手に入れた。アメリカの女神さんのように国の象徴として自由を手に入れた。アメリカの女神さん、私とあんたどっちが自由だい？ そもそも自由ってなんだい？ 私は自由なのか？ 教えてくれよ。私は、自由と道徳どっちを選んだんだ？ 教えてくれよ」

自由の女神が話しかけてくるように現れる

天照「自由の女神？ これが自由の女神か。初めてみた」

自由の女神は崩れ去る

天照「自由ってこういうことか。ありがとう。わかったよ。私の名前は天照。天照大神はその死とともに太陽となり人々の光となっていまも輝

き続ける。　そう、私は天照だ、私は星を見る東京の人々に再び光を与えて夜空に輝く星を写すんだ。私は真実の真昼っ間に真実を照らす太陽にならなければならないんだ。私はノストラダムスを告訴しなければならない。自由の女神さん、あんたの名前は自由っていうのに、なんであんたは動けないんだい？　わかってるよ。それが自由ってことなんだろ？」

天照、空を見上げる

第二十一場

イダジ家

タダシ「ただいま」

妻「あら、おかえり……目、見えないの？」

タダシ「目、見えなくなった」

妻「サングラスかける？」

タダシ「いらない。なにも見たくない……お父さんは？」

妻「告訴のメンバーに加わっている

わ」
タダシ「お父さん、有名人だね」
妻「有名人よ。あなたはもうムメイね」
タダシ「明かりが無いんだ。ノストラダムスさんは結局なにがしたかったんだろう」
妻「お金かしら」
タダシ「いや、お金じゃないと思うんだ」
妻「なんで？」
タダシ「理由はないけど」
妻「それじゃあなんなの？」
タダシ「あの人は、いい人だよ。きっといい人だったんだ。でも、あの人は世間に復讐したかったんじゃないのかな？」
妻「復讐？」
タダシ「民衆に対する不信感だよ」
妻「なにかあったの？」
タダシ「わからないけど、民衆の飽きっぽさに怒りを覚えたんじゃないのかな？」
妻「昔ヨーロッパを救ったっていう？」

タダシ「そうなんじゃないのかな。くるくる変わる民衆の心にさ」
妻「そういうことかしらね」
タダシ「たぶん。あの人が世界で一番有名な人だったからね」
妻「有名になることのつらさが一番わかっていたのかしら」
タダシ「ねえ、僕おねえちゃんに謝らなくちゃならない」
妻「どうして」
タダシ「お姉ちゃん、やっぱり正しかった」
妻「それならずっとおねえちゃんのことを信じてあげなさい（テレビを見て）……お父さん？！」
タダシ「（テレビにレクオが映っている）え？　お父さん？」
妻「お父さん。これって」

第二十二場

人々の叫び声
叫び声とともにせきやうめき
声が聞こえる
天照が出てくる

民衆1「懐中電灯の電池が切れた！」

民衆の持っていた懐中電灯から光が消える

天照「どういうこと？　丘の下の明かりが全部消えた。懐中電灯を持っているはずなのに……あ。星が見える。だんだんと明るくなってきた。星だ。星が見える。月も見える。星が帰ってきた。見えないはずの明かりが帰ってきたんだ。そうか……誰も懐中電灯なんてもたなくてもよかったんだ。星が東京を照らしてくれればそれでよかったんだ」

光が差し始める
天照の目に涙らしきもの

天照「丘の下でみんな戦っている。やっぱり誰も気づいていないんだ。もう星はこんなに明るいってのに……」

飛行機の音

天照「いけない！　午前０時！　お父さんだ！　こっちじゃない。もう、星は帰ってきたわ！　東京に明かりが戻ってきたの！　みんな、自分の目で見えるようになったのよ！　来ないでお父さん！」

テレビでは

記者「ニュースです！　飛行機がハイジャックされました！　どこの国の人物でしょう。飛行機はアメリカ上空を旋回して今にもどこかに当たりそうな気配です。えー、今入った石油紙の情報によりますと犯人はスラム街、現実のスラム街もしくは『あ』の一個下『い』スラムの出身者のようです。今このニュースを見ている全国のみなさん。事件です。この画面を今一体いくらの人が見ているのでしょうか。全人類が見守る中……（飛行機が爆発する）ああ！今、今テロリズムが起こりました！

ビルです！　貿易センタービルに突っ込んでいきました！　まるで映画を見ているようです。　爆発音とともにビルが崩れ去っていきます。　世紀の瞬間です。　歴史の1ページに刻まれるかの事件がたった今起きました。　なにかキラキラしたものがビルの周りに見えます。　あれはなんでしょう。　カメラさん、ちょっとアップにしてください。　あのキラキラしたものは……紙です！　書類のようです。　爆破されたところから膨大な量の紙が宙を舞っています。　うつくしい舞台のラストのように紙がヒラヒラと宙を舞っています。　たくさんの、たくさんの人と、たくさんの紙が今テロリズムによって失われました。　今入ったニュースによりますと、貿易センタービルにはあのノストラダムスほか、天照、ゴマキなど著名人もビルの中にいたそうです。　そして犯人は現実のスラム街もしくは『あ』の一個下の『い』スラムの出身者のレクオという男で、息子が後藤マキさんの芸能マネージャーだと

いうことがわかっています。ノストラダムスの居ない今、石油紙の責任は誰がとるのでしょうか。このテロに意味はあったのでしょうか。世界人類が見守る中、ビルはもろくも崩れ去ってしまいました」

タダシ「なにが見えるの？」

妻「あなたはなにも見えなくていいの。あなたが生きているということが重要なのよ」

　　舞台上一面に紙が舞う

第二十三場

タダシ「ねえ、お父さんは？」

妻「きっと、電車で帰ってくるわ」

タダシ「寝台特急でここまで何時間？」

妻「何百年もかかるでしょうね。星の光はそれくらいの時間をかけてこの街に届くものなの」

タダシ「無責任な光だね」

妻「そう、無責任なの」

タダシ「ねえ、お姉ちゃんは？」

妻「お姉ちゃん……」

タダシ「僕、何も考えていなかったから……生きてる」

妻「お姉ちゃんだって、生きているわよ」

タダシ「お姉ちゃんも、お父さんも、お兄ちゃんも、理想を見てた。僕は何も見えない……」

妻「私だって、タダシだって、生きているの。あなたのことを責める人はいないわ。みんな、そうなんだから」

タダシ「目が見えないよ。何も見えない」

妻「大丈夫。私も目をつぶってあげるから」

天照が出てくる

天照「はあ、はあ……」

天照、床に落ちている紙を拾っては、

天照「ヤマダ……タカハシ……イイ

ダ……ゴトウマキ……！」

その紙を必死に握り締めて

天照「サトウ……ムラオカ……ホソカワ……イダジ、レクオ……！」

それは、死者の名前が記されている紙

天照「お父さん！……タダシは、タダシ！」

天照、「タダシ」と書いてある紙がないか必死に探す

天照「ないわ。うん、ない……ないのね！　よかった……」

ノストラダムスが出てくる

天照「あなた！」

ノストラダムス、銃を撃つ

天照、倒れる

ノストラダムス、そこから去る

一枚の紙が落ちてくる

妻がそれを拾う

妻、その紙を必死に抱きかかえる

タダシ「僕には関係のないことだけど、それから東京は経済的にも文化的にも豊かな国になりました。僕はお母さんと一緒にこのスラム街で生活をしています。それからの東京のことはよく知りません。僕は目が見えなくなり、新聞も読めなければテレビも見ないからです。ただ人づてに、『東京は夢のある街だ』『東京は戦後復興した』などと聞くだけです。僕の周りの人間はみんな有名になって死んでいきました。忠犬ハチ公も小便小僧も尾崎豊も、みんな死んだら有名になりました。マキもノストラダムスさんもお父さんもおねえちゃんも。……僕は生きています。お姉ちゃんは会うたびに僕に言いました。『お前はお兄ちゃんの生まれ

変わりだ。』お母さんは僕に言いました。僕が生きていることが重要だって。目が見えなくても、こうやって生きている僕のことを、果たしてお姉ちゃんは許してくれるでしょうか。……僕には関係ないことだけど、これにて『二十世紀遺産』を終わらせていただきたいと思います」

――幕――